

マダニについて

浦河診療所 櫻井 健太郎

夏が過ぎ、だんだん秋の気配を感じるようになってきました。みなさん、いかがお過ごしでしょうか。ウマの頸や胸、頭に寄生するマダニを今年は多く見かけたので、今回の記事ではマダニについてお話しさせていただきます。

日本国内のマダニの多くは3宿主性マダニであり、卵→幼ダニ→若ダニ→成ダニという4つの生活史をとります。「3宿主性」というのは、ステージごとに吸血する動物を替えていくという意味です。マダニが生息する条件としては、寄生動物、日陰の場所、および植物の三者の存在が重要な条件であるとされています。本来クマ笹や草むらの中に潜んでいるマダニが野生動物と共に放牧地に侵入し、ウマと接触する機会が増えマダニに寄生されてしまいます。多くのマダニは気候の温暖な春～秋にかけて吸血活動を行うため、その時期に吸血して丸々と太ったマダニを発見することが多くなります。

マダニは未吸血の状態ですぐに宿主に付着後、数日間の寄生を行います。吸血し終わったマダニは自然に宿主動物から落下離脱し、次のステージへと脱皮、または産卵をすることになります。マダニが吸血する際には、セメントのようなもので自分の口を固定し、吸血します。マダニの唾液には麻酔物質が含まれており、宿主が噛まれた直後は痛みや痒みを感じないため、マダニは宿主に気づかれず持続的に吸血することができます。

マダニが引き起こす病気としては、吸血したマダニを無理に引っ張って除去することでマダニの口器が折れて皮膚体内に残り、皮膚炎を発症し二次的に細菌感染を引き起こす場合があります。

また、マダニの体内には病原体を保有しておりマダニ媒介性病原体の感染リスクもあります。現在、日本の馬におけるマダニ媒介性疾病の報告は少なく、まだあまり調べられていないのが現状ですが、海外ではライム病やアナプラズマ症といった病気が発生しているため注意は必要です。

マダニを見つけた場合、物理的に除去するのが一般的です。除去する際の注意点は、マダニの腹部を押してマダニの体液成分がウマの体内に逆流しないことと、頭部が皮膚の中に残らないように除去することが大事です。マダニがよく見つかる箇所は頭、耳、頸、たてがみ、尾が多いですが、耳の内側、股、腋窩（わき下）、尾の裏などでもよく見つかります。また、大量に寄生している場合ダニ忌避剤を塗布する方法もありますが、現在日本で製造されている薬剤はウマでの使用報告がないため使用の際は獣医師にご相談ください。

マダニはヒトへも感染する感染症を多く保有しており危険な生き物です。予防にはこまめなマダニの除去が推奨されており、日頃の手入れの際に注意を払ってみてはいかがでしょうか。

